



UNOBUS NARRATIVE
ACTIVE & CREATIVE

宇野バスなら、

夫 side

深夜に帰宅すると妻がリビングで待っていた。

「またタクシーなの？ 九、〇〇〇円もかかるのに！」

今月は送別会や接待が続いていた。

「仕方ないだろ！ 俺にも付き合いがあるんだよ！」

「それはわかるけど、毎回タクシーってどうなの？」

妻は呆れたようにため息をついた。

週末、子供と公園で遊んでいると近所の人から

「もうすぐ深夜バスが始まるらしいよ」と聞いた。

片道二、〇〇〇円で帰れるという。

定期があれば、さらに片道料金を引いてくれるらしい。

ということは俺の場合は一、四八〇円で帰れる。

これは妻も喜ぶと思い、帰ってすぐにその話を伝えた。

次の飲み会の日、早速深夜バスを利用した。

浮いたお金で、内緒のお土産も買っておいだ。

バスを降り、夜道を家まで歩く。

今日は少し誇らしい気分で玄関のドアを開けた。



妻 side

夫から深夜バスの話を聞いたとき

「七、五〇〇円も浮くなんて、

服でも買えちゃう金額じゃない！」と驚いた。

「遅くなる日は絶対深夜バスで帰ってね」と念を押す。

この前は少し言いすぎたかな、とも思っていた。

彼の人付き合いの良さは長所でもある。

でも、タクシー代九、〇〇〇円の連発はさすがに痛い。

次の飲み会の日、夫はちゃんと深夜バスで帰ってきた。

そして、その手には私の好きなチョコレートが。

「え、これ買ってきてくれたの？」

思わず口元がほころぶ。

こういうところが憎めない。

「お茶入れるね」

ソファに座り、チョコレート箱をあける。

彼は隣で誇らしそうにお茶を飲んでいる。

深夜バスが節約とともに

小さな幸せを運んでくれたような気がした。



宇野バスなら、

Busses carry many stories of many people.

